

保育所における子どもの愛着形成への支援に関する一考察

北九州市立大学大学院 社会システム研究科
地域コミュニティ専攻 2012M30001 池田佐輪子

【論文要旨】

保育所に在職中、保育所保育指針に従って子どもの発達段階を踏まえ、応答的関わりを重視した保育を行ってきたが、通常発達で可能であるはずのコミュニケーションがうまく図れない、発達が気になる子どもと出会うことが多くなった。保育所の中で特に発達の問題を感じていたのは、虐待的な環境の中にいる子どもや自閉症スペクトラム障害の特徴を持つ子どもであった。

そのような子どもとその養育者との関わりの様子を観察していると、通常の親子に見られるような親密な関わりが希薄であったり、逆に過剰な関わりであったり、お互いの関わりがうまくかみ合わない等、不自然さを感じる場面がしばしば見られた。このような親子間のコミュニケーションがうまくいかないことの背景の一つとして乳幼児期の愛着(attachment)形成をめぐる問題があるのではないかと考えた。

愛着とはイギリスの精神科医ボウルビィによって、「危機的な状態や潜在的な危機に備えて、特定の対象との近接を求め維持しようとする個体の傾性」と提唱された理論で、「この近接関係の確立・維持を通して、自らが“安全であるという感覚”を確保しようとする」と述べている(Bowlby,1969)。

ところが保育所において、発達が気になる子どもと養育者との関わりの様子を観察すると、親子の間に安定した健康的な愛着が形成されていないように感じられ、“安全であるという感覚の確保ができない”ことによって発達に様々な問題が生じているように思われた。

卒業論文では、子どもの望ましい発達を促すために、親子の愛着形成に向けた支援のあり方について考察したが、保育所での限られた場面での支援ではその効果が十分には期待できないことが予想された。よって親子の愛着形成を支援する前に、まず保育所で特定の保育士と子どもとの間に安定した愛着を形成して、それを基盤に子どもの発達を促し、そのうえで子どもと養育者との愛着形成を支援していく取り組みの方が効果が期待できるのではないかと考えた。

よって本研究では、「親子の愛着形成に何らかの問題を抱えた、発達が気になる子どもに対しては、まず、特定の保育士、さらには複数の保育士との間に安定した愛着を形成することで、その子どもの発達を促すことができる」と同時に、「保育士との愛着を基盤にして子どもと養育者との関わりを支援することが、親子の愛着形成、または修復にも有効に作用する」という仮説を立てた。

仮説を検証するために、先行研究などを参考にしつつ、保育所での「発達が気になる子ども」の発達課題に関するアセスメントを行い、それに基づいて特定の保育士を中心に子どもとの愛着形成を重視した保育計画を立てて実践し、その効果と課題に関する評価・反省(リアセスメント)を行い、さらに次の実践計画に反映していくというサイクルを繰り返していった。それによって保育所での「気になる子ども」の発達援助と養育者支援の取り組みの効果に関する縦断的な検討を行うことを通じて、保育実践と養育者支援についての課題と方法について考察していった。

第1章では本研究の前提となる先行研究の知見をまとめた。

第1節で愛着の定義を紹介し、通常発達における愛着形成のプロセスと愛着が子どもの発達に及ぼす影響についてまとめた。

第2節では愛着形成と幼児期の自我発達の関係について整理し、幼児期の愛着形成を基盤とした自我発達の過程への援助のあり方について整理した。

第3節では被虐待児の愛着形成の問題と愛着障害についてまとめ、その修復に向けての課題をまとめた。

第4節では自閉症スペクトラム障害（ASD）児の愛着形成のプロセスについて整理し、その独特の愛着形成を促進する指導のあり方を提起した。

さらに第5節ではそれら先行研究からの愛着形成や愛着の修復の技法を参照しつつ、保育所の保育士との愛着形成と代替的家族ケア、養育者の子育て支援の課題を整理し、本研究での仮説を提起した。

第2章では、第1章での理論的な整理を踏まえて、保育所での子どもと保育士との愛着形成と、それを基盤とした子どもの発達の変容と養育者支援のプロセスに関する実践的な分析を行った。

【事例1】では、単親で母親から不適切な養育を受けている男児の事例をまとめた。

【事例2】では自閉症スペクトラム障害（ASD）が疑われるが、未診断の男児の事例をまとめた。

【事例3】では、保育所入所をきっかけに専門機関とつながり、知的に境界域と判定されて専門機関との連携のもとに関わった女児の事例をまとめた。

それらの事例分析を受けて、終章では、保育所における保育士との愛着関係を基本とした子どもの発達支援と、それを基盤とした養育者と子どもの適切な愛着の形成に向けた支援の方法について考察し、今後の課題について提起した。